

## 空手道詳説（34）

### 第2章 沖縄史の概説

#### 4 沖縄史の概略（その7、琉球の言語と文化）

##### （1）沖縄の言語

##### ア 海邦国体の思い出

1987年（昭和62年）第42回国民体育大会（以下、国民体育大会を「国体」と略記する。）夏秋季大会は沖縄県が主管で、この大会をもって国体は全国都道府県を一巡した。愛称は「海邦国体（かいほうこくたい）」で、スローガンは『きらめく太陽、ひろがる友情』である。

山形県選手団の場合、往復の航空券手配は県体協が一括して行い、空手道選手団は10月23日の出発から30日の帰着まで、都合8日間の滞在となった。宿舎は全て民泊で、会場（県立浦添高校）となった浦添市民の厚意によって支えられた。山形県開催となる第47回国体（愛称、べにばな国体。以下、「べにばな国体」と記す。）の5年前、筆者はこの国体をもって監督を退き、次年度の「京都国体」からは、「べにばな国体」の運営・選手強化など対策全般の統括を行うことになっていた。

「海邦国体」秋季大会総合開式は、10月25日沖縄市の「沖縄県総合運動公園陸上競技場」で開催された。当チームは午前10時前に会場入り、11時過ぎに15分間ほど激しいスコールに見舞われながら、午後3時過ぎの解散まで5時余りの間、顔も肌も真っ黒に日焼けしていた。10月も末というのに、太陽が真上から射すように感じられたのである。

この総合開会式には、当初、昭和天皇の行幸が予定されていたが、天皇のご体調不良により、皇太子明仁殿下（今上陛下）と皇太子妃美智子殿下（皇后陛下）が行啓、ご代役をお務めされた。

出発に先立ち、お世話になる三家庭に、米沢市特産工芸品の笹野一刀彫「オタカポッポ」をお届けしたところ、代表の方から電話があった。受話器を通してのせいか、話の半分ほどき聞き取れなかった。失礼な言い方だが朝鮮語に近いイントネーションかなと感じた。

浦添といえば、1187年に舜天が統一王に即位して以来、英祖、察度各王統のもとに居城を構え、長く貿易や文化の中心地として栄えた地であり、ある種の緊張感をもって訪れた。

お世話になった8日間は、民泊先の方々から美味しい郷土料理と泡盛の供応に与り、互いにお国自慢に話が弾み、時間の経過を忘れることさえあったが、心配していた会話に不自由はなかった。沖縄県の人たちは、先ず夕食を済ませ、お腹が落ち着くのを待って泡盛を飲み始め、三線（サンシン。錦蛇の皮を張った三味線）を弾き口笛を鳴らし、賑やかに楽しむという風習を初めて体験した。

空手道競技は26日～28日で、本県チームは2名の入賞者をもって無事終了し、その翌日、民泊先のご厚意により自家用車とタクシーに分乗して島内をご案内していただいた。午前中は、激戦地となった本島南端に近い喜屋武岬、「沖縄県営平和祈念公園」（全国都道府県約半数の慰霊塔がる）をはじめ、「ひめゆりの塔」「健児の塔」、「平和祈念公園」から4kmほど離れた山形県出身者の海外戦没者四万余柱（沖縄戦の戦没者は765柱）の諸霊を祀つる「山形の塔」など、生々しい戦争遺跡に思わず息をのみ、戦没者への慰霊参拝の機会を得た幸いに謝し、改めて戦争の悲惨さを肝に命じたのであった。



笹野一刀彫オタカポッポ



県営平和祈念公園



山形の塔

午後は北方に向かってひた走り、国頭郡本部町の「沖縄国際海洋博覧会会場」（1975年7月～76年1月開催）にて大規模な水族館や「イルカショー」を楽しみ、帰路、嘉手納空軍基地（中頭郡嘉手納町、沖縄市、北谷町）近くを通過した際、『この辺りは、沖縄で一番美味しいお米が取れる田園地帯だったのです』などの説明を受けた。

ご案内をいただいている間のこと、民宿先の方とタクシー運転士の打合せは、聞き慣れない早口言葉で、異国語でないかとさえ思った。後になって、滞在中に少しは現地の言葉に興味を示すべきだったという後悔が残った。

別れの日には辛かった。互いに名残を惜しみ、沢山お土産を頂戴して空港に向かうバスに乗車したのであった。

その後、「美ら島（チュラシマ）沖縄総体2010」（インターハイ）が2010年（平成22年）7月、沖縄県にて開催され、会場は国体と同じ浦添高校であった。筆者は、沖縄国体を懐かしく思い浮かべ、6月末に当時お世話になったご家庭にサクラamboを送り、本県選手団の応援をお願いした。

## イ 本土の方言

筆者若い頃のことである。同じ東北地方の秋田県や青森県の友人の言葉が聞き分け出来なかった。それは致し方ないとして、同県内酒田市のしかも同年代の方と一献酌み交わした時、酔うほどに先方の言葉が分からないまま相槌を打っていたのを思い出す。近隣の地でさえ不自由極まりなく、分かり難い言葉はいやに早口に聞こえてくる。今は日本全国どこに行っても会話に不自由しない世ながら、戦後10年15年くらいまでなら、今は消えてしまった地方味豊かな言葉のやり取りが普通であった。

筆者の住まう山形県の場合、幕藩体制下にあつて四つの藩が存在した。米沢置賜の上杉藩、山形村山の最上藩、新庄最上の戸沢藩、鶴岡庄内の酒井藩がそれで、四つの藩の統治により、同県内であっても地域により語彙を含めて言葉遣いが違うので、話しをすれば何処の生れか直ぐ分かる。例えば、『・・・です』の語尾は、置賜では『・・・そ』、村山では『・・・べ』、新庄では『・・・じゅ』か『・・・ず』、庄内なら『・・・の』となる。藩の境界線近くの場合なら、微妙に双方の混じり合いがある。

本土の場合、青森県（津軽弁）と鹿児島県（薩摩弁）の比較なら、日本標準語（ヤマトグチ）と沖縄方言（ウチナングチ）よりもっと大きい隔りがある。

かつては、地域による隔離性が強かったから、限りなく数々の方言があつた。その上、明治維新前であれば、地域性だけでなく公家言葉、武士言葉、町人言葉、職人言葉など、いろいろな言語が混在した。

## ウ 琉球語か琉球方言か

琉球語もしくは琉球方言とは、沖縄県と鹿児島県奄美諸島で使われてきた言語のことで、日本語と系統は同じと考えられているが、それを日本語とは別の言葉とする立場と、日本語の中の一方言とする二つの見方がある。

この二つの立場（見方）について、言語学上では次の四つの見方ができるとされている。（ウィキペディア「琉球語」の「言語か方言か」から引用）

- ① 言語であって、方言ではない。
- ② 方言であって、言語ではない。
- ③ 言語とも、方言ともいえる。
- ④ 言語か方言か、論じるのは無意味である。

以上、四つの見方があるということは、言語学において琉球語は言語と方言を区別する客観的かつ明確な基準が存在しないということになる。独立した言語と方言の区別が曖昧な事例は、世界各国に存在する。

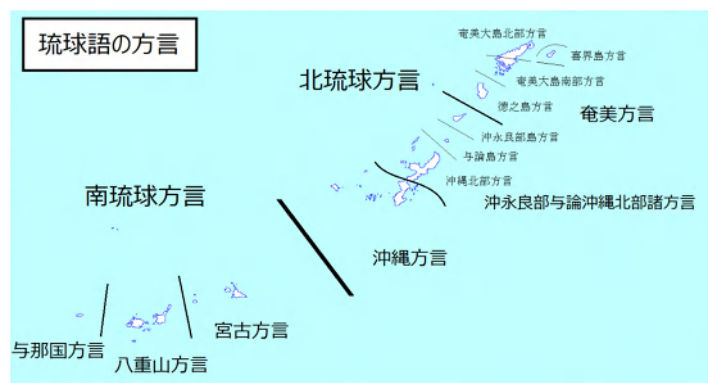
以上から、言語と方言の区別は民族論や政治論、国家論といった主観的かつ繊細な問題に関わってくる。

琉球の言葉はどちらなのか。この「沖縄史の概説」では、言語学を掘り下げるのを眼目としないため、琉球語と琉球方言（沖縄方言）を併記して扱うべきでところ、以降「琉球方言」と記して進めたい。

## エ 琉球方言の区分

琉球方言といっても、右の地図に示されるよう、地域によって四つに区分される。

一つ目は、一般的に琉球方言といわれる「沖縄方言」である。王府のあった沖縄本島中南部や近辺島々で話される地方語で、歴史的には三山



鼎立（1322年頃～1429年頃）いわれた時代の中山王、南山王の支配圏と一致し、長く政治・経済・文化の中心地となっていた地域である。

二つ目は、沖縄島北部の方言「沖永良部与論沖繩北部諸方言」であるが、沖永良部与論とは沖永良部島と与論島でのことで、この2島は奄美の領分である。

三つ目は、北方の奄美大島を中心とし、沖永良部島と与論島を除く奄美群島で話される「奄美方言」である。

四つ目は、南方の宮古島を中心とする八重山列島で話される「南琉球方言」（八重山方言と呼ぶこともある）である。

この四つの言葉の間では、意思疎通が困難なほど隔たりがある。しかし、基は一つの言葉から派生したと推定され、総括して琉球諸語とか琉球語派と呼ばれている。

以上四つの方言にしても、地区や島々によって違いがあるのは、本土の場合と同じである。

琉球方言は、本土南西部の影響が強いと推測されている。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 藤原稜三著「格闘技の歴史」、1990年3月30日第1版、ベースボールマガジン社発行
- ・ 上地完英監修「詳説沖縄空手道」、1977年11月1日上地流空手道協会発行
- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1986年4月25日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 井沢元彦著「日本史集中講座」、平成19年6月20日初版、祥伝社発行